

18 世紀ドイツにおける庭園文化と文学言語

Garden Culture and Literature in 18th-Century Germany

プロジェクト代表者：松原 良輔（教養学部・准教授）

1. はじめに

少なくともルネサンス以降のヨーロッパにおいて、庭園文化と文学言語との間には密接な相互影響関係が認められる。造園家はもっぱら古典古代の文学や神話から想を得つつ空間を造形し、彫像その他の装飾物をそこに配置してきた。また文学言語の方も、失われた黄金時代や非在のユートピアを表象するにあたって、しばしば庭園のイメージを用いてきた。

18 世紀の初頭、イギリスを震源地としてヨーロッパ庭園史上最大のパラダイム転換が生じ、19 世紀前半にかけて大陸にも広まっていったことはよく知られている。いわゆる「幾何学的整形庭園」から「非整形的風景庭園」への転換である。とはいえ、庭園と文学との相互関係がこのパラダイム転換によって途絶えてしまったわけではない。ピクチャレスク美学、歴史意識、感情の表出といった、近代初期のこの時期を特徴づける主題が、庭園と文学という二つの表象システムを貫流している。

2. ゲーテの文学と庭園文化 — 小説『親和力』を中心に

周知のようにゲーテは、生涯を通じて庭園文化と植物に強い関心を示し続けた文学者である。1780 年代以降、彼の共感は次第に時代遅れになりつつあった風景庭園から離れ、整形庭園へと向かっているが、それにもかかわらずその後執筆された『親和力』において、風景庭園が物語の構造上重要な役割を果たしているのは、大変興味深い。この小説における庭園の主題は以前から注目を集めており、フランスの思想家フーコーが提出したタブローという記号体系のパラダイムを参照した、意義深い先行研究もある。しかし、歴史的な時空間（古代地中海世界、中世北ヨーロッパ）を参照する文化装置としての庭園という観点からは、なお考察されるべき点が残っているように思われる。その方向で考察を進めるために、18 世紀後半の庭園に数多く出現した人工廃墟という現象に目を向ける必要が生じてきた。

3. 今後の展望

昨年 9 月「廃墟をめぐる断層」と題した研究発表を行った。風景庭園の重要な構成要素である人工廃墟の源泉には、18 世紀独特のピクチャレスク美学があるといわれているが、人工廃墟を持つ歴史的射程はもう少し長く、ルネサンス以降のヨーロッパ文化が示してきた、「奇想（カプリッチョ）」と呼ばれる芸術的構想力への関心という文脈抜きには見えない点多々ある。建造物が担っていた実用的・象徴的価値が時の経過と共に失われ、しばしば本来とは異なる記号的価値を帯びるにいたったのが「現実の」廃墟とするならば、人工廃墟は最初から純粋な記号である。記号としての廃墟を自由自在に配置することによって生まれる驚きに満ちた風景が、「奇想」風景と呼ばれるわけだが、そこでは廃墟の表す古代世界は、奔放な芸術的構想力の操作対象である。しかし近代ヨーロッパ世界において、「自国の文化的起源」を「真正の過去」に接続しようとする傾向が強まるにつれ、「奇想」的な想像力は周縁へと追いやられていく。ゲーテの小説がこの大きな流れとどう関わっているかを追求することが今後の課題である。